興福寺中金堂発掘調査　現地説明会資料

興福寺境内第１期整備事業にともなう発掘調査（平城第３２５次調査）

２００１．６．１７

法相宗大本山　　興　福　寺

奈良文化財研究所　平城宮跡発掘調査部

Ⅰ　はじめに

興福寺では、興福寺境内整備構想を策定し、現在その第１期境内整備事業を進めている。この整備事業に伴い、９８年度に中門、９９年度に回廊北東隅・中金堂前庭部・東僧房南西部の調査を行なった。２０００・２００１年度は３回目として中金堂基壇を中心とする東西５１ｍ、南北３６ｍ、面積１８３６㎡の調査区を設定した。本年１月から６月末までの予定で、現在も調査中である。

本調査の目的は、主に以下の３点である。

１　中金堂創建期の様相を明らかにし、整備事業に資すること

２　中金堂創建期から現在に至る遺構の変遷や特徴を捉えること

３　明治時代に出土した鎮壇具の出土位置を確定すること

Ⅱ　中金堂略史

『興福寺流記』によると、藤原鎌足が病に伏した時、妻の鏡女王がその平癒を願い建立した山階寺が興福寺の始まりである。後に飛鳥に遷り厩坂寺とよばれ、平城遷都に伴い藤原不比等によって現在の地に移され興福寺と改称された。その時に建てられたのが中金堂であり、遅くとも養老５（７２１）年には完成していた。その後北円堂・東金堂・五重塔・西金堂が聖武天皇や光明子らの発願によって建立され、壮大な伽藍が造り上げられた。

中金堂は、『興福寺流記』によれば、奈良時代には東西約３７ｍ、南北約２４ｍの巨大な建物であった（資料３）。応永６（１３９９）年再建の中金堂は、現存する図面によると高さ３０ｍを越えると推定される（資料４）。ちなみに応永２２（１４１５）年に造営された現東金堂は、南北約２４ｍ、東西約１３ｍ、高さ約１５ｍである。

この中金堂は７度焼失したが、そのたびに再建を繰り返してきた。例えば最初の火災である永承元（１０４６）年の火災の際には、平等院で知られる藤原頼通と定朝によって盛大な再建がなされている。なお、江戸時代に当初の中金堂の廂部分までの大きさで建てられていた仮金堂（通称赤堂）は、昨年解体された。

Ⅲ　既往の調査成果

先にもふれたように、９８・９９年度に調査が行われ、多くの成果をあげている。その詳細については、それぞれの調査概報に譲るが、今回の調査と関わる点について整理をしておきたい。

１　伽藍敷地造成

中門東半では谷を埋めた整地土を確認しており、興福寺造営時に大規模な土地造成がなされたことが明らかになっている。これに対し、中門西半や北面回廊では、そうした整地土はなく、もとからあった丘陵を削って整形して基壇とする、地山削りだしの工法で造られていることを確認した。

２　時期変遷

中門の調査では５時期の遺構変遷を確認した。

Ａ期　Ｂ期以前（創建期）

Ｂ期　凝灰岩による基壇外装、玉石敷（平安時代）

Ｃ期　玉石敷上に凝灰岩切石を敷く（鎌倉時代）

Ｄ期　花崗岩切石を用いた基壇外装（室町時代）

Ｅ期　Ｄ期以降（江戸時代）

回廊などの調査でも以上の所見は基本的には変化していないが、Ｂ期の玉石敷について創建期にさかのぼる可能性を指摘した。

Ⅳ　今回の検出遺構

今回検出した遺構には、中金堂基壇、須弥壇、階段、北面回廊、中金堂基壇外周の雨落溝、石敷の他、中・近世および近代の土坑・暗渠等があるが、現在も調査中であるので主に先述の３つの主目的に沿った、中金堂そのものに関わる遺構について述べることにしたい。

１　中金堂基壇

中金堂基壇上には６６個の、いずれも火災痕跡をとどめる礎石が現存する。最大長３ｍ（約５㎡）を越える巨大なものである。これらの礎石や文献・絵画・建築図面等から中金堂の建物は東西五間・南北二間の身舎四面に廂がつき、さらにその外側に裳階がまわるものと考えられている。今回の調査では、これらの礎石がほぼ原位置を保っており創建期にさかのぼり得ると見ているので、建物の平面プランは創建期以来の形態を現在に至るまで引き継いでいると考えられる。

基壇は中門西半等と同じ地山削りだしの工法で造成されていることが明らかになった。発掘調査前の基壇外装は花崗岩切石を用いた東西４１ｍ、南北２７ｍの壇正積基壇であったが、それを撤去した下から、ほぼ同位置で凝灰岩切石列を数カ所で検出した。この切石は地山を掘り込んですえられており、創建期のものと考えられる。以上から、創建時の基壇は凝灰岩切石を用いた壇正積基壇で、その規模は現在とほぼ同じであったことがわかった。

その他に、地覆石や、廂部分で小柱穴群を検出している。後者は、明治期に中金堂が役所として利用された時の床束の穴であろう。

2　須弥壇

須弥壇は大きく３時期の変遷を経ていることが想定される。

①期：平面規模は、南面は身舎柱筋背面からはじまり、外装は凝灰岩壇正積であったと推定できる。身舎南側の礎石上面の加工痕跡・火災痕跡及びそれらと対応する位置にある凝灰岩地覆石がこの時期の遺構である。凝灰岩が地覆に利用されている点を考慮すると、これが創建期の姿である。

②期：平面規模は調査開始前の状況より一回り小さく、外装は石垣となる。須弥壇階段部分で石垣を、南面の数カ所で石垣の痕跡を確認している。石垣の外装という点から、江戸の再建に関わるか。

③期：調査開始前の状況。花崗岩切石を用いた壇正積基壇であった。明治期に中金堂を役所等として利用するために、明治７年に須弥壇は削平された。その際に奈良時代の鎮壇具が発見され、現在東京国立博物館に収められている。その後明治１７年に仏堂として再整備する為の工事の際にも、やはり奈良時代の鎮壇具が出土し、興福寺に所蔵されている。調査前の須弥壇はさらにその後の大正時代以降に築成されたものである。

今回明治に削平されたと見られる面で土坑を２ヶ所検出した。中からは近代の遺物と混ざって和同銭等が出土しており、明治期の鎮壇具出土跡の可能性もある。完掘しているが、微細な遺物が多いため、出土遺物の検討を加え慎重に検討していきたい。

3　階段

階段は基壇四面につけられており、南北階段はそれぞれ３時期の変遷を確認している。

イ　南面階段

Ⅰ期：一間ごとの独立した階段が３基ついた時期。この形態はちょうど薬師寺金堂や興福寺中金堂復元模型のような階段の状況である。Ⅰ期の遺構として、基壇南面東側階段積土、基壇壁面切欠（束石（つかいし）すえつけ用）、地山を掘り込んですえられた凝灰岩切石、Ⅱ期の階段下層で確認した凝灰岩切石がある。

Ⅱ期：五間幅の階段の時期。これは中近世の中金堂を描いた絵・図面に見られる（資料５）。Ⅱ期の遺構は、凝灰岩と玉石で作られた雨落溝、基壇南面中央部階段積土である。

Ⅲ期：三間幅の階段の時期。明治初年の写真、調査前の状況がこれにあたる。

ロ　北面階段（北面階段は全時期を通じて一間幅である）

Ⅰ期：一番内側の時期の凝灰岩切石の時期。

Ⅱ期：外側の凝灰岩切石の時期。玉石の雨落溝がⅡ期の階段に対応している。なお、Ⅱ期の間に一部凝灰岩から花崗岩へ改造されているが、その時期については検討中である。

Ⅲ期：現状の地覆石の時期。

ハ　東西階段

それぞれ二間幅で、現状ではⅡ・Ⅲ期に対応すると見られる改作を確認しているが、大きな変化は確認できていない。今後の調査によってⅠ期に相当する階段の状況が明らかになるものと思われる。

4　北面回廊

金堂の東西で、とりつき部分を確認した。東は二間分、西は一間である。一部には礎石が残り、複廊（ふくろう）で、梁間（はりま）は１２尺である。これは、これまでに検出している南面や東面の回廊の様相と一致している。

5　基壇外周の遺構

これまでの調査で検出した建物周囲の玉石敷及び雨落溝を今回の調査でも確認した。

南面：金堂南面の玉石敷が、基壇縁まで達することが判明した。文献史料を再検討した結果、永承の再建（最初の再建）後の供養の際には、この玉石敷が存在していたことが確実となった（資料６）。

回廊以北：幅６０㎝の玉石の雨落溝外側で、テラス状に約９０㎝幅で玉石敷がめぐり、そのさらに外側に一段下がって拳大の石が敷かれる状況を確認した。また調査区東北部分で、幅１５０㎝ほどの南北方向に走る帯状の玉石敷を検出した。北は調査区外に伸び、南は途中で東に直角に折れて調査区外へと伸びる。この玉石敷にも拳大の石敷が伴う可能性がある。これらテラス状の高まりを持ち、帯状に伸びる玉石敷の性格については現在検討中である。さらに基壇外周の玉石敷上面には、凝灰岩切石を敷いている時期があることを確認した。

Ⅴ　出土遺物

1　瓦

３２５次調査では、奈良時代初頭の興福寺創建から近代に至る、各時代の瓦が出土している。しかし、現在までのところ、創建期をふくめた奈良時代の瓦の出土量はきわめて少ない。一方、中金堂東側基壇外側の焼土層（土坑）では、平安時代後期・鎌倉時代の瓦が、ある程度まとまって出土している。 これは、永承元（１０４６）年以後合計７回に及ぶ、中金堂の焼失と再建に関連する資料と推定される。

2　土器・陶磁器

中世及び近代のものが大半を占めている。近代のもの以外は、ほとんどが破片である。

3　金属製品・ガラス製品

明治７・８年および１７年に発見された金堂創建期の鎮壇具の残片と考えられる和同開珎とガラス玉が、須弥壇の周辺や階段の積み土の中から出土した。鎮壇具とは、寺院の堂塔を建立するときに地を鎮める法要を行い、そのときに地下に埋納された品々のことである。興福寺の中金堂には、銀製の器や銅製の鏡、金の延金（のべかね）をはじめとする多数の品が納められていた。

ガラス玉は、平玉と呼ばれる碁石形のもので、濃緑、緑、淡緑、黄緑、黄、黄褐、褐色、濃褐色など様々な色のものが８００点余り発見されているが、今回は緑色のものが１点出土した。

このほかに、建物にかかわる遺物として銅製の飾金具や鈬、風鐸の破片などが出土した。

Ⅵ　まとめ

本調査の三つの主目的について、ほぼ達成することができたと考えている。

1　創建期の中金堂基壇をほぼ明らかにできた。

イ　基壇規模・・・平面規模はほぼ創建期と同じ

ロ　礎石・・・ほぼ現状が創建期と同じ

ハ　階段・・・南面は独立三間

2　中金堂基壇・基壇周囲の遺構変遷を明らかにできた

今回確認できた各遺構の変遷を整理すると、以下のようになる。

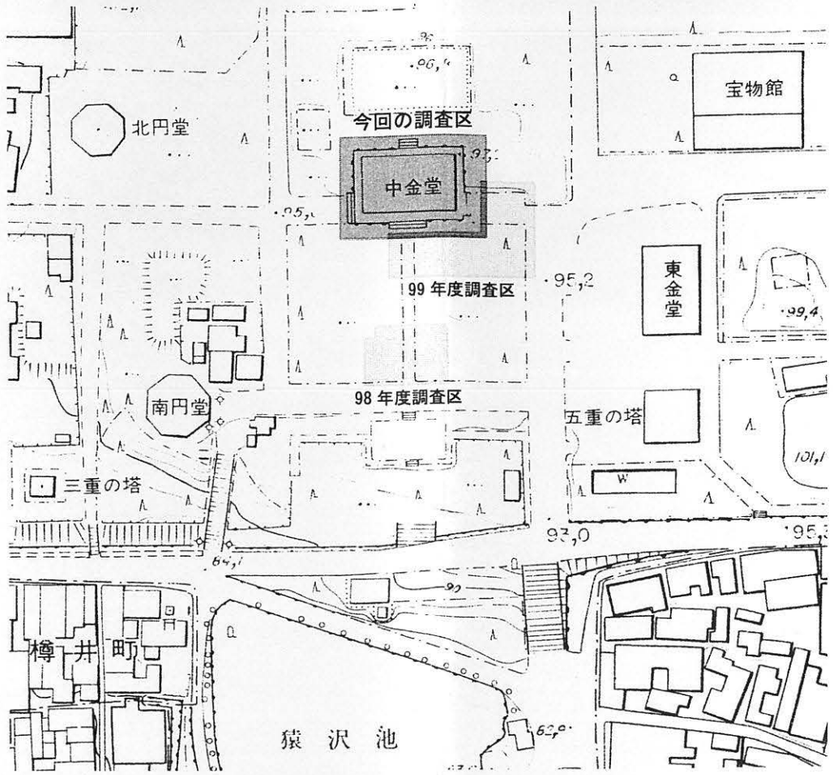
（＊印は、発掘調査では不明だが他の資料から推測されるもの）

<table>
<tr><th></th><th>基壇化粧</th><th>階段</th><th>基壇下</th><th>須弥壇</th></tr>
<tr><td>A期・創建期</td><td rowspan="3">凝灰岩・壇正積</td><td>I</td><td>----------</td><td rowspan="3">①</td></tr>
<tr><td>B期・平安再建</td><td rowspan="2">II</td><td>玉石敷</td></tr>
<tr><td>C期・鎌倉再建</td><td rowspan="3">凝灰岩</td></tr>
<tr><td>D期・室町再建</td><td>花崗岩？・壇正積＊</td><td rowspan="3">白妙・芝生＊</td><td></td></tr>
<tr><td>E期・江戸再建</td><td>石垣</td><td rowspan="2">III</td><td>②</td></tr>
<tr><td>F期・近代</td><td>花崗岩・壇正積</td><td>③</td></tr>
</table>

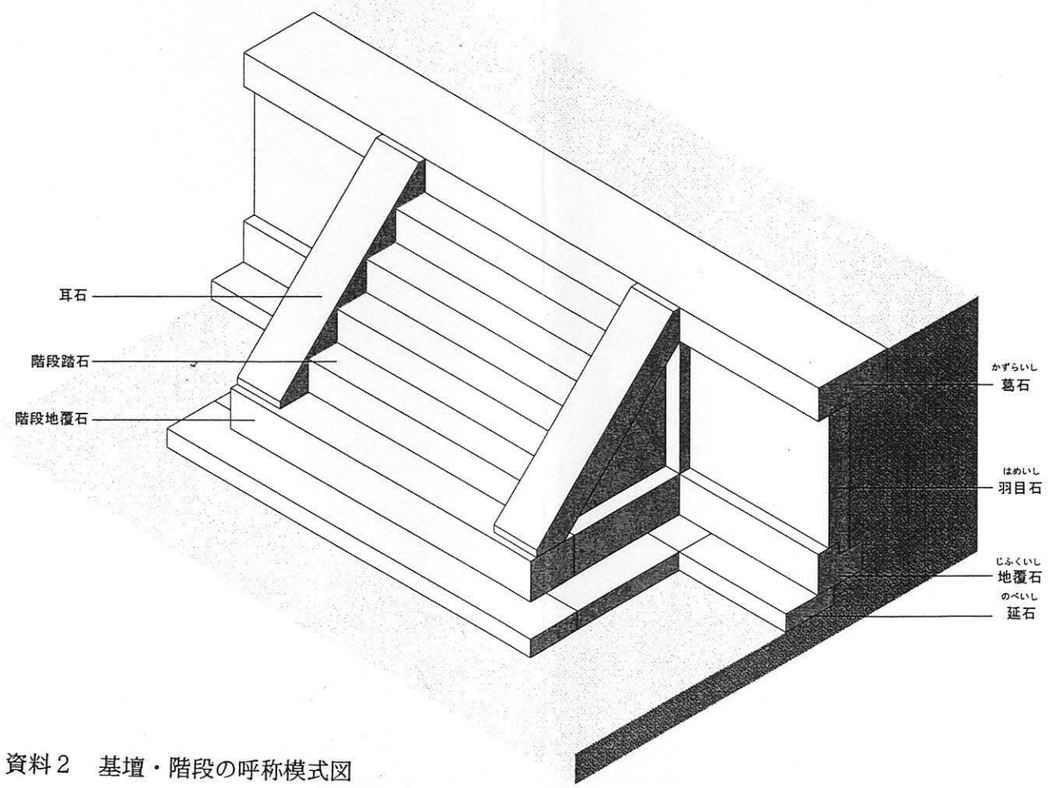
3　須弥壇上で明治における鎮壇具出土跡と見られる土坑を検出した。

ただしこの点については遺物などのより詳細な検討が必要である。

建物の平面プラン・基壇規模・南面の独立三間階段等は、まさに平城京の寺院を代表するものであり、藤原氏の氏寺にして京内四大寺の一つである興福寺の面目躍如たるの観がある。またその後の変遷も、摂関藤原氏の氏寺、大和国の支配者としての興福寺を語って余りあるものと感じられる。



資料１　調査位置図



資料２　基壇・階段の呼称模式図

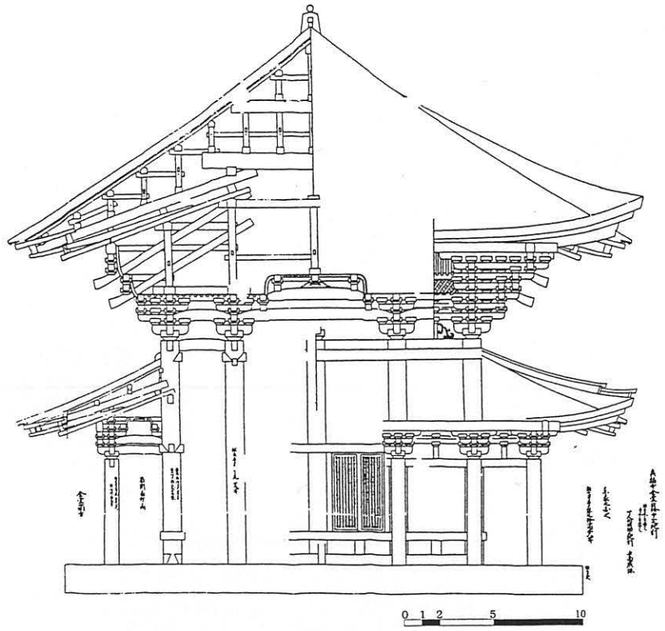
一中金堂院

金堂一宇。實字記云。長十二丈四尺。延暦記云。九間十丈五尺云云。廣口八尺。延暦記五丈八尺。大小垂木縮井高縮用二殿金剛師。延暦記高二丈三尺五寸。

元明天皇代和銅三稔。歲次戊戌 淡海公所造立也。

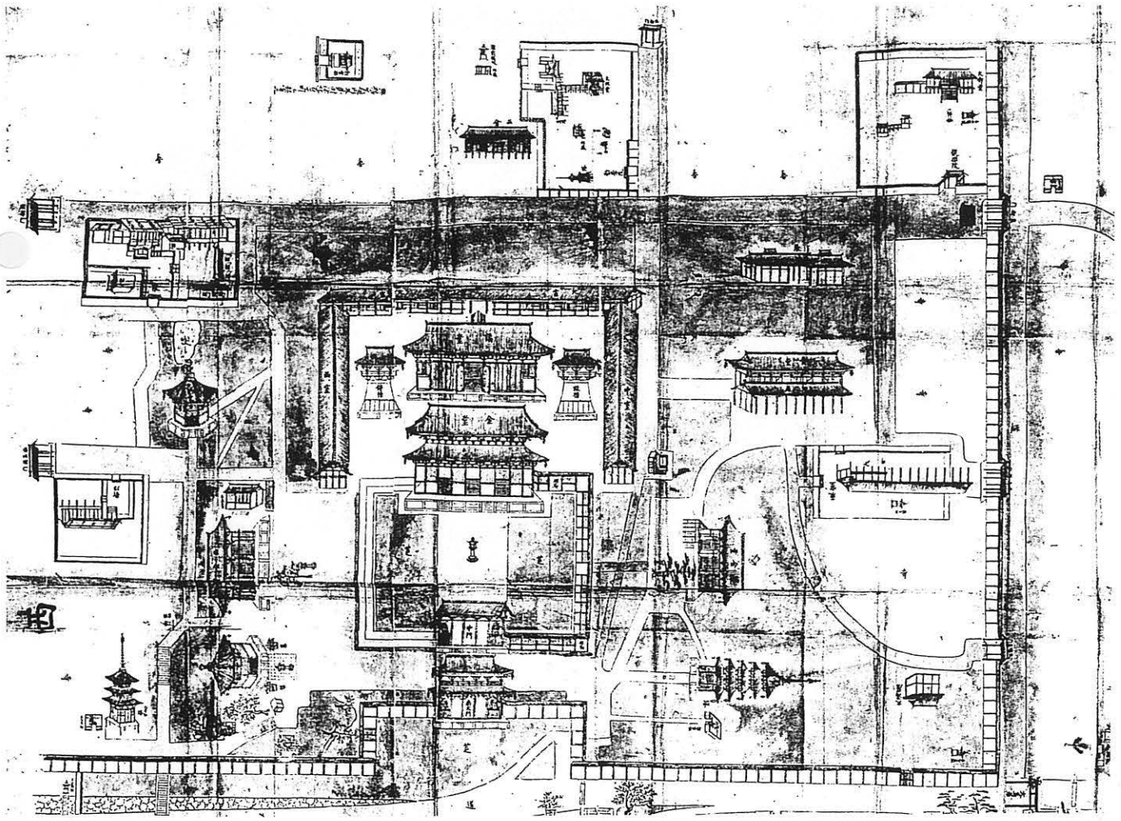
『興福寺流記』より

資料３　奈良時代の中金堂



応永６年再建中金堂実測図（『興福寺建築諸図』より）

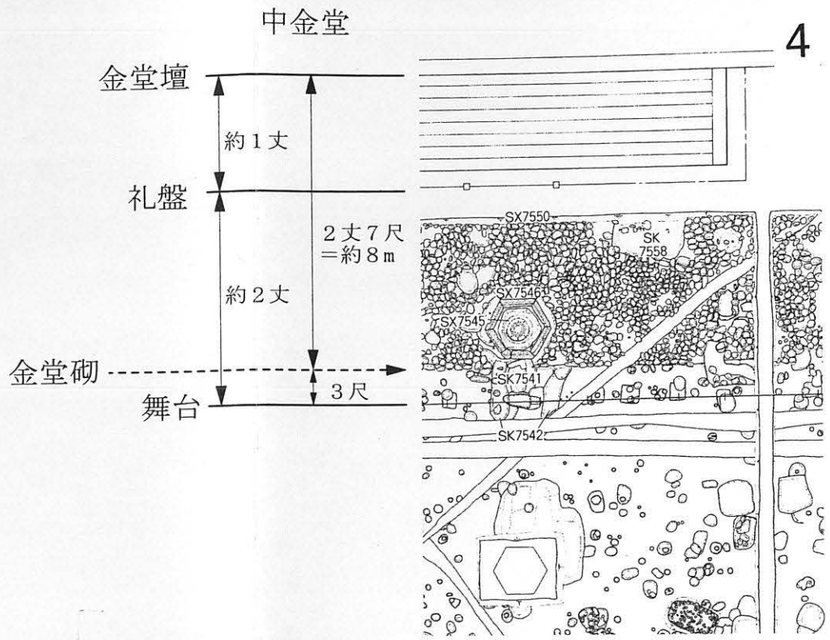
資料４　中金堂実測図



資料５　『興福寺伽藍春日社境内絵図』

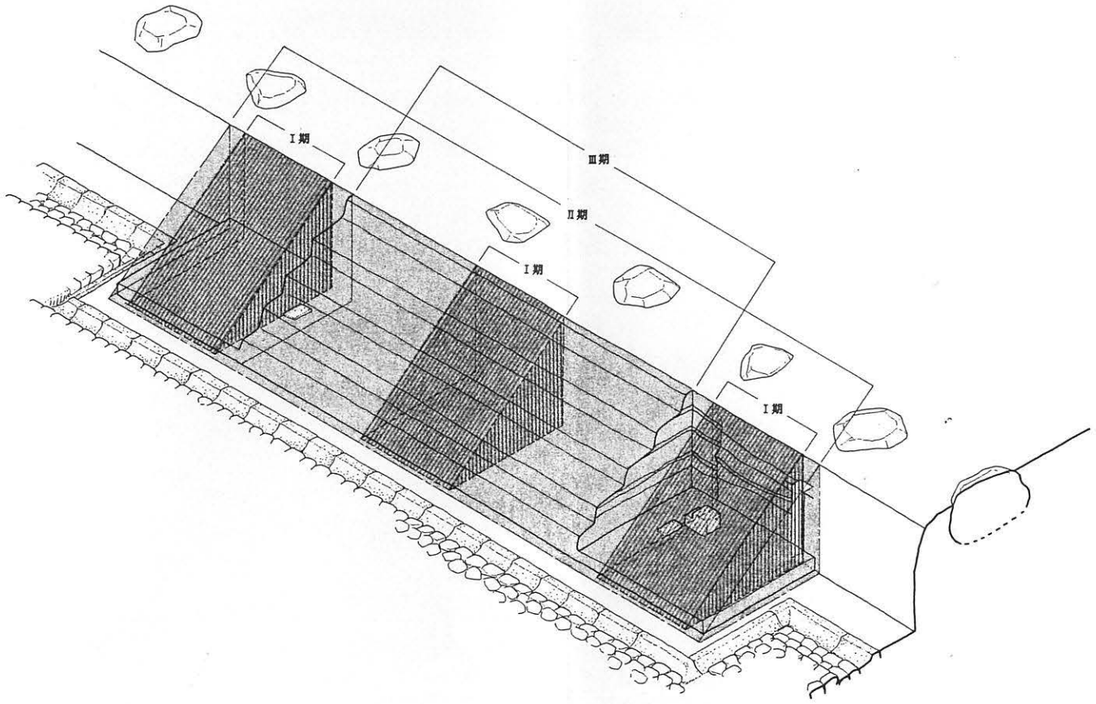
間。東西行立二供花机六脚一。在二年文一。并地敷二面敷物等一。南庭當二佛面東西間一。各立二蓋高座一脚。去二後一許丈。在二當佛面間一。立二禮盤一二脚一。去二後一許丈。去二禮盤一南二許丈。構二立鉾基一。南北四丈八尺。其西三丈八尺。在二殿并南北塔一。各凡去二金堂一三尺。前十日木工寮所二結構一也。敷物明櫛。内藏寮勾之。其上北端中央。立二

『造興福寺記』より



『造興福寺記』模式図　　９９年度概報より

資料６　中金堂南面玉石敷の見切り



資料７　南面階段変遷模式図

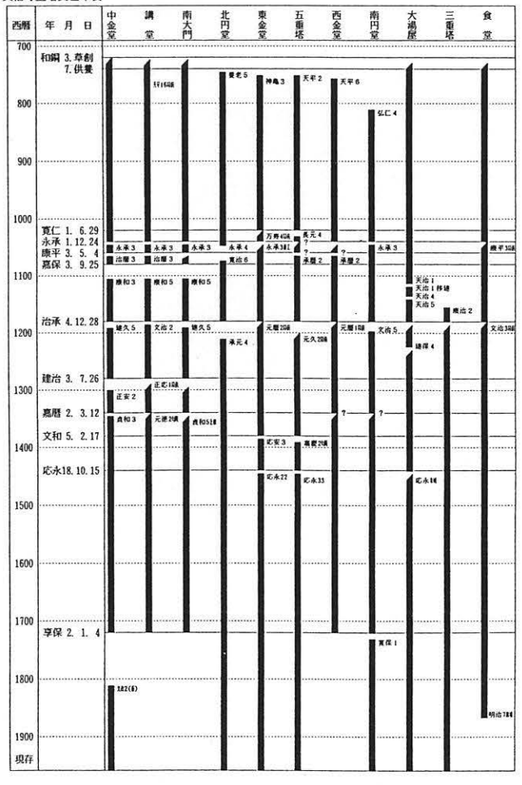
興福寺略年表

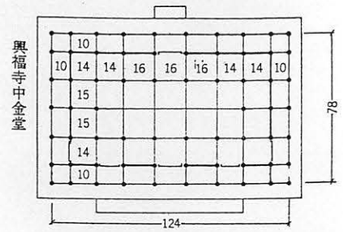
時代	和暦（西暦）	興　福　寺　の　歴　史
白鳳	大化元年(645)	この頃、鎌足が釈迦三尊像を造立する
	天智 8年(669)	鎌足の妻、鏡女王が、山階陶原に山階寺を造立し、鎌足の釈迦三尊像を安置する
	天武元年(672)	飛鳥浄御原宮に遷る。この頃、山階寺を大和国高市郡厩坂に移し、厩坂寺と称す
	天武14年(685)	山田寺の薬師三尊造立－銅造仏頭
奈良	和銅 3年(710)	平城京遷都。藤原不比等、厩坂寺を平城京左京三条七坊に移し、興福寺と号す
	和銅 7年(714)	3月 興福寺金堂供養
	養老 4年(720)	10月17日「造興福寺仏殿司」を初めて置く
	養老 5年(721)	8月3日 元明・元正天皇、北円堂建立
		8月3日 橘夫人三千代、金堂に弥勒浄土像を造る
	神亀 3年(726)	7月 聖武天皇、東金堂を建立
	神亀 4年(727)	12月 興福寺勅禅院梵鐘鋳造
	天平 2年(730)	光明皇后、五重塔建立
	天平 6年(734)	正月11日 光明皇后、西金堂を建立。十大弟子・八部衆像等造立
	天平10年(738)	3月28日 山階寺（興福寺）に食封千戸を施入
	天平18年(746)	正月 講堂本尊不空羂索観音像造立
	天平勝宝元年(749)	5月20日 寺田百町施入される
	天平宝字元年(757)	12月8日 山階寺（興福寺）施薬院に越前国の水田百町を施入
	天平宝字 5年(761)	2月 東院西堂建立
	天平宝字 8年(764)	9月11日 東院東堂建立
	宝亀 2年(771)	2月22日 東院地蔵堂建立
	延暦10年(791)	3月10日 講堂に阿弥陀三尊像を造立
		4月 北円堂四天王像造立
平安	弘仁 4年(813)	藤原冬嗣、南円堂を建立
	弘仁 7年(816)	南円堂銅燈籠鋳造
	元慶 2年(878)	4月8日 鐘楼・僧房焼失
	安和元年(968)	興福寺の僧兵が初めて神木を動座して入洛す
	天禄元年(970)	興福寺別当定昭、一乗院を建立
	永祚元年(989)	大風により東院西堂倒る
	長和 2年(1013)	8月 薬師如来坐像造立

時代	和暦（西暦）	興　福　寺　の　歴　史
南北朝	貞和 3年(1347)	5月11日 金堂に本尊像を安置
	文和 5年(1356)	2月17日 五重塔・東金堂焼失
	応安元年(1368)	6月1日 東金堂上棟、同三年瓦を葺く
	永和元年(1375)	6月16日 五重塔立柱
室町桃山	応永18年(1411)	閏10月15日 五重塔・東金堂・大湯屋焼失
	応永22年(1415)	6月26日 東金堂再建なり、本尊を造立して安置す
	応永33年(1426)	五重塔再建なる
	宝徳 3年(1451)	10月14日 徳政一揆により、大乗院(禅定院)等焼失
	大永元年(1521)	興福寺現存最古の絵馬描く
	文禄 4年(1595)	文禄検地、興福寺・春日社領として二万一千石余が定まる
江戸	宝永 5年(1708)	5月 「興福寺伽藍春日社境内絵図」を描く
	享保 2年(1717)	1月4日 金堂・講堂・僧房・西金堂・南円堂・中門・南大門等焼失
	寛保元年(1741)	4月 南円堂立柱
	寛政 9年(1797)	4月 南円堂入仏
	文化 8年(1811)	金堂本尊等の再興勧進をおこなう
	文政 2年(1819)	9月 金堂建立－篤志家の寄進による仮堂建築
	慶応 4年(1868)	3月 神仏分離令発令
明治	明治 3年(1870)	12月 社寺上地令が発せられ、堂塔以外のすべての寺地を没収される
	明治 7年(1874)	食堂・細殿とり壊される
	明治13年(1880)	2月14日 興福寺旧境内、春日野を合わせて奈良公園とする
	明治14年(1881)	2月9日 興福寺再興を許可される
	明治17年(1884)	3月 中金堂基壇から奈良時代の鎮壇具発見される
	明治30年(1897)	6月10日 古社寺保存法公布され、北円堂・三重塔・五重塔が特別保護建造物に指定される
	明治33年(1900)	7月8日～同35年1月15日、五重塔修理
	明治40年(1907)	10月～同43年3月、三重塔修理
昭和	昭和12年(1937)	10月30日 東金堂解体修理中に銅像仏頭(旧山田寺講堂本尊)発見される
	昭和34年(1959)	3月 食堂跡へ宝物収蔵庫（国宝館）建設し、開館する。
	昭和37年(1962)	10月31日 大湯屋解体修理完了
	昭和40年(1965)	6月30日 北円堂解体修理完了
	昭和45年(1970)	3月31日 菩提院大御堂改築（昭和43年、鎮壇具発見）
	昭和49年(1974)	11月23日 仮金堂建設、中金堂諸仏移座
	昭和53年(1978)	3月31日 防災工事完了
	昭和54年(1979)	8月31日 三重塔修理
平成	平成 3年(1991)	1月 南円堂修理開始
	平成 8年(1996)	3月31日 南円堂修理完了
	平成 9年(1997)	4月5日 南円堂修理落慶法要

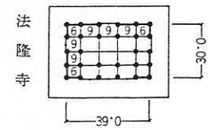
時代	和暦（西暦）	興　福　寺　の　歴　史
平安	寛仁元年(1017)	6月22日 五重塔・東金堂焼失
	長元 4年(1031)	10月20日 五重塔・東金堂供養
	永承元年(1046)	12月24日 北円堂・倉を除く諸堂焼失
	永承 2年(1047)	1月～2月 造興福寺司を定め再興始める
	永承 3年(1048)	3月2日 金堂・講堂・南円堂等供養
	永承 4年(1049)	2月25日 北円堂・唐院・伝法堂等焼失
	康平 3年(1060)	5月4日 金堂・講堂・中門・南大門・僧房等焼失
	治暦 3年(1067)	2月25日 金堂・講堂等供養
	承暦 2年(1078)	正月27日 五重塔・西金堂供養
	応徳 4年(1087)	興福寺権別当隆禅、大乗院を建立
	寛治 6年(1092)	1月19日 北円堂・食堂供養
	嘉保 3年(1096)	9月25日 金堂・講堂・三面僧房・南大門等焼失
	康和 5年(1103)	7月25日 金堂・講堂等供養
	康治 2年(1143)	12月 皇嘉門院、三重塔を建立
	治承 4年(1180)	12月28日 平重衡の兵火により全焼す
	治承 5年(1181)	6月15日 興福寺再興のことを始む
	養和 2年(1182)	8月16日 東金堂・西金堂上棟
鎌倉	文治 2年(1186)	10月10日 講堂再建、食堂もこの頃再建なる
	文治 3年(1187)	3月9日 山田寺薬師三尊を東金堂に移す
	文治 5年(1189)	9月28日 南円堂再建なり、諸仏開眼供養
	建久 5年(1194)	9月22日 金堂・南大門等供養
	建久 7年(1196)	7月5日 東金堂維摩居士像造立－仏師定慶
	建仁 2年(1202)	3月10日 梵天像造立－仏師定慶
	元久 2年(1205)	2月22日 この頃、五重塔再建なる
	建永 2年(1207)	4月 この頃、東金堂十二神将像造立なる
	承元 2年(1208)	12月17日 北円堂諸像の造立を始める－仏師運慶
	承元 4年(1210)	11月 この頃、北円堂再建なる
	建保 3年(1215)	4月26日 西金堂天燈鬼・龍燈鬼像造立－龍燈鬼・仏師康弁
	寛喜元年(1229)	この頃、食堂千手観音像造立
	貞永元年(1232)	12月 西金堂八部衆・十大弟子像修理
	建治 3年(1277)	7月26日 金堂・講堂・三面僧房・中門・南大門等焼失
	正安 2年(1300)	12月5日 金堂等供養
	嘉暦 2年(1327)	3月12日 金堂・講堂・西金堂・南円堂・中門・南大門等焼失
	暦応 3年(1340)	5月 吉祥天荷像開眼

興福寺堂塔興亡年表

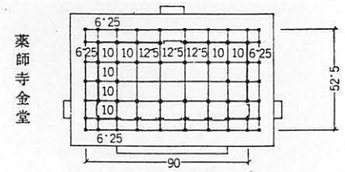




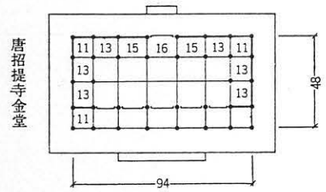
興福寺中金堂



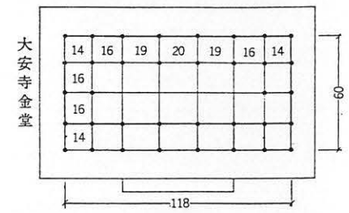
法隆寺



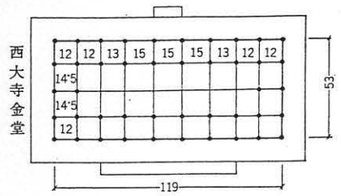
薬師寺



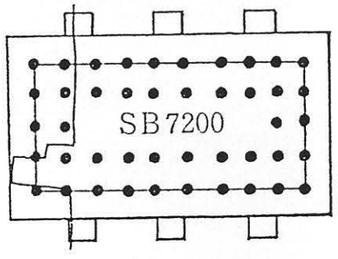
唐招提寺



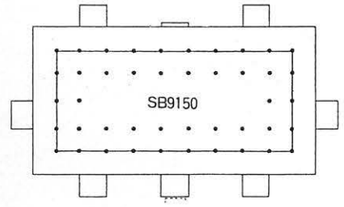
大安寺



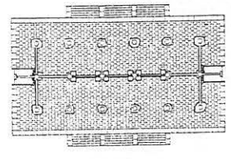
西大寺



第一次大極殿

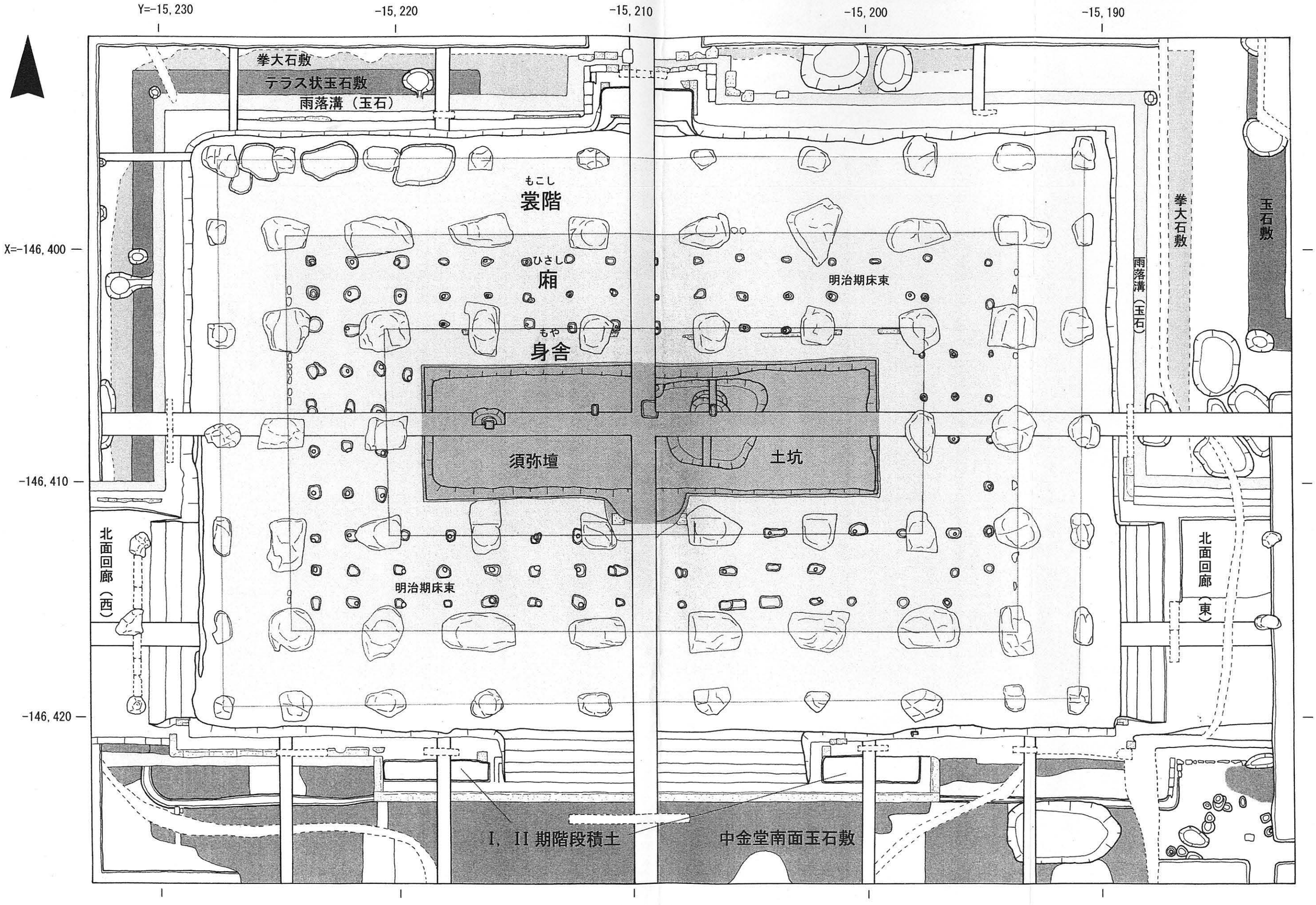


第二次大極殿



朱雀門

参考資料　南都諸大寺および大極殿・朱雀門の規模の比較



発掘調査遺構図（1：150）